



日口交流

発行: 特定非営利活動法人日口交流協会

E-mail: nichiro@nichiro.org

Home Page: <http://www.nichiro.org>

〒106-0041 東京都港区麻布台3-4-14

麻布台マンション401号

Tel: 03 (5563) 0626 Fax: 03 (5563) 0752



ロシアンクッキング in 田町リーブラ～夏のロシア“涼”理～

安部 花子

7月24日、田町リーブラでのロシア料理教室に参加しました安部と申します。前回、同じく田町リーブラで開催された5月の回が人生初の料理教室だったのですが、あまりに楽しかったため今回も続けて参加いたしました。

前回と同じく緊急事態宣言

下における開催だったので、完成品の喫食タイムは無し。しかしながら、前回よりも半日分延長してスペースを借りたため、ゆとりある時間の中で存分に交流を楽しむことができました。15名程度の参加者の過半数がスラブ系で、通訳のひとりの方が午前中で戦線離脱。日本人参加者のロシア語力が試される会となりましたが、運営の方々のサポートのおかげで大成功に終わりました。

今回作る料理は、夏のロシア料理の定番、「アクローシュカ」という冷や汁のような野菜の冷製スープ・ピーマンの肉詰め・「カルトーシュカ」というジャガイモ型ロシアンチョコレートケーキの3品。

まずはアクローシュカ作りからスタート。ロシア人に大人気のこの冷製スープは外国人から見たらかなり独特なロシア料理として有名で、細かく切ったハーブ、野菜、ソーセージをサワークリームによく混ぜ、クワスというビールのような炭酸発酵飲料を加えて仕上げます。

私もいつか夏のロシアを訪れたときに食べてみたいと思っていた料理で、本日のメニューに入っているのを見てガッツポーズ！しかも今回は、市販のクワス・先生のお手製クワス・市販の炭酸水の3パターンでそれぞれ仕上がりの違いを食べ比べできるという、料理研究家も大満足の充実した実演内容ではありませんか！ふつうのロシア旅行などではまず出来ない体験です。3パターンともそれぞれ特徴があり美味しく仕上がりましたが、私はやはり先生のお手製クワスを加えたものが、野菜のさっぱりとした風味が



引き立ち、一番美味しく爽やかに感じました。

教室の中盤からは、むしろ言葉の壁を楽しみはじめる参加者たち。「ヨクヤッタ！」「メイジン！（名人）」など、スラブ系参加者が日本語でバンバン褒めてくれて、大盛り上がり。日本人参加者もつたないロシア語で「すばしーば！（ありがとう）」と返すと、お互い満面の笑顔。普段よりコミュニケーション

が不便なのにも関わらず、この楽しい時間がずっと続けばいいのにと願うような、心温まる夏の思い出となりました。

残りの品も無事完成し片づけがひと段落したあとは、ソーシャルディスタンスを守りながら、ロシアンティーと軽食で休憩タイム。冷房の効いた室内とはいえ長丁場の立ち仕事で体調が悪くならないよう、水分と栄養をしっかり補給します。前回講師のセルゲイ先生特製ピローグ（野菜のパイ）は絶品で、ほっこりとした気持ちで料理教室を締めくくることができました。

参加者の皆様、本当にお疲れ様でした。また、裏方として準備をしてくださった運営の方々、精一杯参加者を楽しませようともてなしてくださったスタッフの皆様、この場を借りて感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

お願い

NPO日口交流協会では、ロシアでの日本の伝統文化などの紹介、国内でのロシア関連の学習会、ロシア人とのイベント交流など幅広い活動を続けています。これらの活動を一層推進させるために皆様からのご寄付をお願い申し上げます。一口千円からいくらかでも結構です。

*ご協力頂いた方に小さなロシア関連グッズを進呈中！
振込先: 郵便口座00160-9-66486、加入者: 日口交流協会
連絡先: 日口交流協会事務局 E-Mail: nichiro@nichiro.org
Tel: 03-5563-0626 Fax: 03-5563-0752

お知らせ

●オンライン講演会

『日口の心を結ぶ伝統文化の紹介と交流』

講師: エフセワ・エカテリーナ氏

サンクトペテルブルグ在住で、日本とロシアの交流に活躍しているエカテリーナさん（日口友好協会副会長、㈱MIYABI社長）に日本留学や日口交流について、オンラインで語っていただきます。

日時: 11月13日(土) 15:00～17:00

会場: ZOOMによるオンライン講演会

会費: 無料(先着30名予定)

申込: 氏名・電話・E-mailなど明記して協会まで。

TEL: 03-5563-0626 e-mail: nichiro@nichiro.org

●ロシア語クラス生徒募集中！

初級2 (水曜18:00～19:00) オンライン中級 (月曜18:00～19:00) ゼロからクラス (月曜19:15～20:15)

*緊急事態宣言解除後は事務所で少人数で実施。消毒、パーテーション等で十分配慮しておりますが、受講の皆様はマスク着用、換気、手洗い等、ご協力をお願いいたします。プライベートレッスンも実施しておりますので、ご希望の方はご相談ください。ベテラン講師陣がお待ちしております。

コルド・ナターリア (初～中級)、イローナ・パルフェノワ (中～上級)、タチヤナ・スニトコ (初～上級)、ウラジーミル・ボロビエフ (初～中級)

*事務所での教室も再開します。



職人さん訪問体験

笠原 以津子

モスクワに帰られる方が、日本の思い出に、伝統工芸の体験をしたいとの依頼を受けた千葉さんからお話があり地元の職人さんをお願いすることにしました。荒川区には江戸から続く工芸技術を受け継ぎ、伝えている職人が多く住んでいます。他区にも伝統工芸保存会がありますが、荒川区の保存会は都内で最も職種が多く、職人の数も多いのです。その中から、お土産にもなり、1時間くらいで出きるもの、2軒の移動を考えた結果、つまみ簪と版画の見学、体験受け入れをお願いしました。お2人共喜んで引き受けて下さいました。

まずはつまみ簪の戸村さん。密にならないようにと、商店街の理事長さんが2階の1軒を借して下さったそうです。下町ならではのですね。戸村さんの仕事ぶりは、いつも傍で見てきたつもりでしたが、初めて体験してみると大変難しく私には無理で、早々にリタイアをし、写真撮りをする事にしました。ロシアの方々は、何の苦もなくさっさと作られるのでびっくりしました。

それぞれに個性溢れる作品(花や蝶のピン止め、ブローチ等)が出来ると、戸村さんの作品の大きな簪を髪につけて写真を撮ったり、また自分が仕上げた物の他に、ストラップのお土産も頂いて、皆さん大喜びでした。そこは下町のアーケード商店街で、八百屋さんで焼きたてとうもろこしを買ったり、和菓子屋さんでお団子を買ったりしました。

2グループに分かれて車で移動をし、次は版画見学と体験へ。こちらは3代続く版画彫りの関岡さん宅です。名人であるお父様を見事に引継ぎつつ、ロックの世界を版画にしたり、新しいことにも挑戦されてます。関岡さんの動画を交え



ての大変丁寧な説明を熱心にきき、道具を手に取り、その世界に感動された様子。関岡さんは、ある有名な画家の描いた牡丹の花を彫ってましたが、その原本の絵の牡丹の色合いに「早速友禅でも表してみたい」と密かに思いました。

もう1方のグループは、隣の部屋にある版画刷りの体験です。こちらは関岡さんの甥の若き刷り師。好きな図案と色を選んでの絵葉書の刷りを体験。ロシアの方は、友禅ですが、何事も丁寧にされます。体験が終わると、周りにある図案集を熱心に見てました。昔の人が考えた図案は、なんて大胆で活き活きしているのでしょうか。どこの図書館にいてもこのような資料はないので、つい見入ってしまいました。

2つの体験に満足して下さった皆様は、関岡さんの家の近くにある有名な商店街を散策したり、ハンコ屋さんでそれぞれ自分の名前を漢字にした判子を注文したり、よい思い出になってくれたようです。

それにしても、通訳のオクサーナさんは、専門的なことや、感覚的なことを上手く伝えてくださる事にいつも感謝します。千葉さんのご指導もあり、さぞ多方面を勉強されているのでしょうね。

ロシアの方には、日本の伝統工芸はどう映ったでしょうか。後継者が減り、このままでは途絶えてしまうと、荒川区では後継者育成事業という制度があり、行政が頑張ってくださいますが熱心に体験をされていたロシアの方を見て、自分も伝統工芸に携わっている者として、まずは自分が、もっと努力をし、よい物を作らなくてはと痛感いたしました。私にとっても大変楽しく、実のある1日になりました。(理事)



きもの体験交流

千葉 麻里

4月15日の通商代表部でのきもの交流に引き続き、大使館からのリクエストで5月31日(月)に2回目のきもの体験交流を行いました。場所は田町リーブラの広い和室を朝から午後5時まで借り、同僚の着物講師4人に声をかけました。木挽輝香、辻田直美、内藤佳子、林由美子の4名は着物教室を運営しており、日頃、着付けの仕事でも一緒になることが多いベテラン陣です。みんなで子供や男女の着物を持ち寄りました。

大使館からは女性18人、男性1人、女兒6人、男児4人、時間をずらして来場しました。それぞれに和傘や扇子、おもちゃの刀などの小物を持ち寄り、会場の抹茶茶碗を使ったりしながら思い思いにポーズを取って記念撮影しました。今回は、通商代表部と同様、カメラマンが参加していたので良い写真が撮れたのではないかと思います。



着物の先生方も毎度のことながら、皆さんの喜ぶ顔を見るのが楽しみのなっているとのこと。子どもに着せるのも慣れているので、手早く可愛く仕上げていきます。色白の美男美女がモデルなので、着付けの手もはかどるというものの。

最後にテーブルを出して、大使館の方々が持ち寄って下さった熱い紅茶と手作りケーキで一息。それぞれみんなにロシアのお土産もいただきました。毎回、こういった心遣いがあるのも、他での着付けと違うように感じます。

ロシアの皆さんに着物を体験していただく行事も毎年恒例になって久しいです。先生方もちょっと体格の違う外国の方への着付けに慣れ、話し合っ工夫したり大き目の振袖を用意しておいてくれたりするようになりました。言葉はわからなくてもきつくはないか、どんな色がいいか、と手振りで交流を楽しんでいます。心の通う草の根の文化交流が国境を越えて、平和の輪が広がるならこんなうれしいことはありません。(副会長)

「モスクワ・アラカルト66」

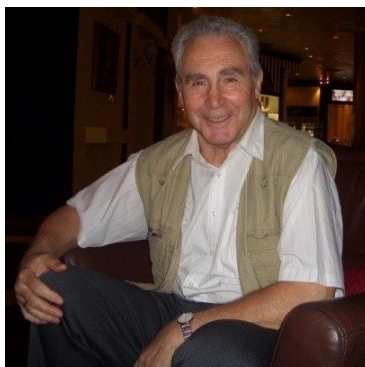
「今日のソ連邦」とフラテ氏のこと

日向寺 康雄

あらゆることには始まりがある。私がロシア、正確にはソ連と最初に向き合ったのは高2の時だった。受験前で「世の中に敷かれたレールに疑問を持たず、このまま乗っていてよいのか、別の道はないのか」とぼんやり未来への不安に駆られていた時だった。

ある朝私は、家でとっていた朝日新聞一面最下段に「怪しい(?)」広告を見つけた。『今日のソ連邦』というグラフ雑誌のもので、ソ連大使館広報部が月2回出しておりオールグラビア、送料負担のみで何と誌代は無料だという。私は「勇気」を出して早速購読を申し込んだ。あの時感じた不思議な「後ろめたさ」とスリルを、今でもよく覚えている。それから家族が見つかる前に回収すべく、郵便受けに目を光らせ、ドキドキワクワクしながら到着を待った。そしてついに届いた雑誌は、さほど厚くはないものの思いのほか巨大で、表紙にはクレムリンと今はなきロシアホテルを背景に、白く美しいココシニクを頭につけ薄いブルーの優雅なサラファンをまとった、天使のようなピャトニツキ民族合唱団の女性達が写っていた。その時16の少年は「いつか必ずモスクワに行く」そう強く念じたのだった。

ちなみに約20年後、私は幸運にもこの合唱団の日本公演で通訳をさせて頂いたが、天使のうち数人はまだ健在で、魅力的な面影は残しつつも実に貫禄あるリーダーに成長されていた。この雑誌は、それまで全く知らなかった世界への窓を開いただけでなく、その後の私の人生を大きく変えた。1982年同誌主催ソ連邦結成60



周年記念論文コンクールに応募、私は特賞を得て10日間のモスクワ&モルドバ旅行をプレゼントされる。生まれて初めての海外旅行、それだけでも大興奮なのに、到着したのはブレジネフ書記長の葬儀の日だった。私は空港で、出迎えのフェリクス・ブラテAPN通信記者に必死で暗記した「偉大な指導者」逝去に対するお悔やみを述べたのだが、彼は丁寧に応じながらもいわずらっぽく笑った。

この出会いこそが、私の初のソ連滞在を夢のようなものにし、私がロシアの人と文化に生涯関わるきっかけとなったのだ。氏は私が接触を望んでいた世界初のデフシアター(モスクワ身振り・表情劇場)と特別に連絡をとり、演出家や俳優達と直接会い舞台見学もできる手はずを整えてくれた。深夜、どうしても腹がすいた時には、鞆から携帯湯沸かし棒(?)を取り出し紅茶を入れ、いい具合に塩味が効いた乾燥黒パンを御馳走してくれた。モルドバの農家で大量にもらったピクルスのため空港で重量オーバーになった時も、お土産を買って懐の厳しい私を思いやり、黙って超過料金を払ってくれた。彼は、ユーモアに溢れ男気のある誠実で有能なジャーナリストで、その後『今日のソ連邦』最後の編集長となった。その彼が今年2月、この世を去った。ソ連邦崩壊そして『今日のソ連邦』休刊から30年、ソ連はすっかり過去のものとなり悪く言われることも多い。しかしあそこにはたくさんの素晴らしい人間がいた。私は氏の笑顔、深い感謝を込めて今も鮮やかに思い出す。

(元モスクワ放送チーフアナ、現中大及び早大講師)

～イルクーツク便り(15)～

留学生活7年を迎えて・11

阿部 耕大

こんにちは、イルクーツク在住の日本人、阿部耕大です。無事大学院も卒業し日本完全帰国まで残り2週間余りとなりました。誰が言ったかシベリアのパリという地に住み始めて8年が経過しましたが、この間に町の様子も大きく変わると散歩する度に思います。コロナ禍で何軒か閉店へと追い込まれたもののカフェの数が増えましたし、5年前まではイルクーツクで全く見かけなかったアイスコーヒーが今はほぼ全てのカフェで提供されているのも興味深いです。またロシア全土でブームなのかベトナム料理や韓国料理のレストランも増えました。イルクーツクでは昨年ラーメン居酒屋(合体させる所がロシアらしい)なる日本食レストランOishiもオープンしそれなりに人気です。値段の割には味が…という意見を多く聞きますが(私も賛同します笑)。カフェ以外では先日私がもうすぐ帰国するので友達数人でバーベキューをしたのですが、遊具施設や観覧車、アスレチックなどを併設するПолянаという屋外バーベキュー場を初めて訪れ、日本や欧米と遜色ない施設に驚きました。ロシア人のシャシリクといえど個人所有のダーチャが川岸で勝手に始めるようなものを想像していたもので(笑)名所の一つでもあるアンガラ川沿いの遊歩道も綺麗に整備されており、きっとコロナ禍がなければ夏は旅行者で賑わっていたのだらうと思いました。

日本との交流に目を向けると、私が卒業したイルクーツク大学では3年前から宇都宮大学との交換留学の枠が復活したこともあ

り、留学に来る日本人学生や、ロシア人学生が日本へ行ける機会も以前より増えたようです。だからこそコロナで交流が途絶えてしまったのが残念で仕方なく、例年4月に開催されていた日本語のカラオケコンテストも2年連続で中止となっており、日本語を学ぶロシア人学生のモチベーションに影響が出なければいいのですが。とはいえ9月から新しい日本人留学生も来ており(逆にロシア人はなぜか日本へ留学できないという不公平)、少しですが日本との交流が再開しているようです。

最後に8年間の留学を終えての感想を少しだけ。外国語の勉強においては文法や発音、語彙力は日本国内でも十分習得可能で、とりあえず留学という考えに反対の人もいます。しかしながら自分の経験を踏まえると、現地人とロシア語で交流したり、ロシア語で別の学問を学んだりする過程でロシア人の価値観、国民性、文化素養などを言語を通して垣間見ることができました。文化と言語は密接に結びついており、言語の世界観、ロシア語で言えばязыковая картина мираは現地で一定期間暮らすからこそ見えてくるものだと思います。留学の価値はそこにあり、オンライン上の学習で習得するのは不可能だと思います。嫌なことも楽しいことも沢山あった留学生活がもうすぐ終了する為、今回で記事の寄稿は最後となります。今までこんな拙い文章を読んでくださった読者の皆さん本当にありがとうございました。

ヴォルガの古都ウーグリチ

畔上 明

ヨーロッパ最長の大河、ロシアの人々にとって「母なるヴォルガ」と親しみを籠めて呼ばれる大動脈の流れは、その川を辿っていくことで、波乱万丈なロシアの歴史の様々な姿が見えてきます。

ムソルグスキーの歌劇「ボリス・ゴドゥノフ」をご覧になったことはありますか。プーシキンの戯曲を基とし、リューリック朝の終焉からロマノフ朝創設までの間の動乱時代(スムータ)、日本では江戸幕府の始まろうとする時期にツァーリとなったボリス・ゴドゥノフ(1552-1605)を描いたドラマです。

リューリック朝最後のツァーリとなったフォードル1世(1557-98)の義兄であるボリスが摂政として、先帝イワン4世(雷帝)の末っ子ドミートリー(1582-1591)が2歳の時その母マリヤ・ナガーヤと共に送り込んだ先がモスクワから北に240kmのヴォルガ畔りの古都ウーグリチでした。

時計工場「チャイカ」がありチーズ生産研究所があることから「ヴォルガのスイス」とも呼ばれるウーグリチですが、クローズ・アップされるのは16世紀末幼いドミートリー皇子が謎の死を遂げたことで歴史が動き出したと言えます。てんかんの発作を起こした際ダーツ遊びに使っていたナイフが首に刺さってしまったという事故説、ボリス・ゴドゥノフ犯人説、刺客失敗説等々、事件調査をしたワシリー・シュイスキーが見解を何回も変えたこともあり時代によってその解釈が変化していきました。

歌劇では、ボリス・ゴドゥノフの陰謀によって死に至らしめたこと、その後実は生



イリヤ・グラズノフ (1990-2017)
画集より「皇子ドミートリー」

きていたという偽のドミートリーが出現、ポーランド軍を引連れモスクワへ進軍してくることでボリスは死ぬ迄悩まされ続ける話となっています。

ウーグリチ・クレムリン(15-19世紀)の領域の中、ドミートリー皇子が7年間暮らした宮殿は15世紀末に建てられた当時のもの、北西ロシアの特徴であるレンガ装飾の建物の内部は現在ウーグリチ歴史美術博物館となっています。

3度も現れたという偽ドミートリーが僭称者であることを証明するため、ドミートリー皇子の遺骸が掘出され殉教者として聖人に列せられこととなりました。ドミートリーの死の現場は一世紀ののち1692年ピョートル大帝の命令により血の上の聖ドミートリー教会が建てられます。教会内部にはイタリア・ルネッサンスの壁画を思わせるフレスコ画が1772年に描かれ、ドミートリーの死について物語っています。

いかにもロシア的と思われるのは、ドミートリーの死を急報した教会の鐘が、その後の混乱を起こすきっかけとなったとして罰せられ、鐘を鳴らす舌を抜かれ、鞭打ちの刑を受け、シベリアへ送られ、19世紀末アレクサンドル3世の時代に戻されたということです。そして舌のないままの姿でこの教会内に展示されています。

15世紀の教会が建っていた場所には、1713年スパソ・プレオブラジェンスキー大聖堂が建立されました。その内部には昔の教会の基礎が残されています。巨大なドーム内は柱が1本もなく、1860年に設けられた7段に及ぶイコン壁は美しく、聖堂内で歌われていた聖歌隊の澄んだ響きはいつまでも耳の奥に残るのです。(「プロコ・エアサービス」シニア・アドバイザー)

ウズベキスタン便り

寺尾 千之

7月号では、大崎さん発案のインターン制度を紹介しました。一方、日本では、'01年6月から、事務局のある流山市を中心にウズベキスタン紹介活動が展開されて行きます。当時「県立流山青年の家」では「国際交流・文化活動発表・模擬店などを通した明るい地域づくり」をテーマに、年2回、約3000名が参加する流山フェスティバルを開催していました。このフェスタ実行委員長が、当時、私がコピーのため頻繁に利用していたコンビニのオーナーでした。その彼が「フェスタでウズベクブースを用意できるよ」と声をかけてくれたのです。この予期せぬ幸運に力が入らない訳がありません。早速、松戸の記者クラブに出向き「日本初ウズベキスタン紹介です」と情報提供、三大紙地方版と地元紙にフェスタ開催予告記事が掲載されます。当日の6月3日には数十人が開店前からウズベクブース前に並ぶほどの人気になりました。カラフルな民族衣装と青いリシタン陶器が醸し出すエキゾチックな雰囲気(写真ご参照)が、更に多くの人々を惹きつけていきます。写真左下の封蝋(ふうろう)された荷物には、有名陶芸家の直径15cm、30cm、40cmのプレート、子ども達が作った箸置き、30cm四方の手織り椅子マット等が入っていました。午前中にそれら品々は完売され、売り上げの6万余円全額を学級に寄付することができました。フェスタは'05年の「つくばエクスプレス」開業に伴

い、'04年11月で終了しますが、毎回売り上げ全額を学級に寄付することができました。大崎さんご夫妻は、8回のうち3回も応援に駆けつけてくださいました。

素晴らしい出会いもありました。学級から託された民芸品を何箱分もメンバー30人で手分けして届けてくれたシルクロードを自転車で走破するグループ「地球と話す会」、「日本語ボランティア講師募集」の大きな看板をブース前に設置してくれた流山市教育委員会、写真展示でウズベキスタンの魅力を伝えた写真家、海外での日本語教育に関心の高い元大使ご夫妻、ウズベキスタン大使館書記官、都内や福島を拠点に友好交流を進めていた諸団体のメンバー、HP作成や留学生のホストファミリーを名乗り出た地元住民、留学生とウズベクピラフの料理教室を主宰したホストファミリー、ウズベクダンス、ベリーダンス、バリダンス、小田原甲冑隊の武士の舞、ウズベク民話の紙芝居の披露などなど、惜しみなく得意技を披露してくれたボランティアの多彩さには心底驚いたものでした。

時代は移り、ガニシエル校長がSNSを駆使して舞鶴市など諸団体と独自に交流を継続していますが、約20年前のフェスタでのダイナミックな草の根交流が学級の活動基盤を構築したことに間違いはないと、百枚に及ぶフェスタ写真に写るサポーターの顔を一人ずつ眺めながら改めて感じ入っています。

(リシタン・ジャパンセンター事務局長)

